

空にふれるまでのあいだ

廣瀬智央×小林正人×小粥文晴

2006年7月8日（土）－9月12日（火）

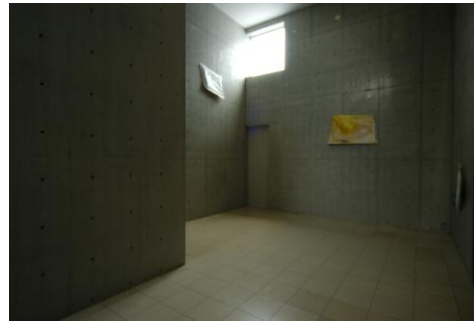


Photo : Jun Kumagai

主催：ヴァンジ彫刻庭園美術館

協力：旭化成ケミカルズ株式会社、カラーキネティクス・ジャパン株式会社、高砂香料工業株式会社、トランローグ有限公司、旭化成テクノプラス株式会社、CAMPOLONGHI ITALIA s.r.l.

この地球環境が誕生して依頼、空は、常に我々のはるか上方にあり、普遍的に我々とともにありました。空のかたに何があるのか、それは未知の空間でもあり、あるときは、神話、宗教的に様々な比喩が生まれ、古今東西の文明では、空の高みと形而上的な高みが重ねられ、神の居所とされてきました。20世紀に入り、ロケットが大気圏を突き抜け、我々をとりまく地球環境の解明は進み、空がなにものであるかという膨大な情報を得ることができました。にもかかわらず、我々の感覚が掌握できるのは、地球上のごく限られた範囲であり、手を伸ばせば届くのは、ほんのわずかな空気の重なりすぎません。本展覧会では、現在活躍中の3人の日本人作家が空をテーマにインスタレーションを行います。

確かなものはなにひとつ存在し得ない今日において、空は、私たち誰にも共通する永遠の外部であり、ひとつの指標としてあり続けます。ここで表出される空は、情報と知覚の奇妙なはざまにありながら、それでもなお、自分自身の感覚でゆらぎゆく世界を認識しようとする、過程そのもののように感じられます。本展では、それぞれの作家たちの、空にふれるまでの距離をご覧ください。

アーティストトーク

廣瀬智央×小林正人×小粥文晴

2006年7月8日（土）16:00-

レストラン マンジャ・ベッシェ

廣瀬：今回はさらに香りを空に関係づけるという試みをしました。「漠然としたつかみどころのないもの」という共通項をインスタレーションとして新しく表現しました。今回の匂いのモチーフはレモンではなくオレンジです。なぜ今回はオレンジかというと、あまり知られていない回青現象という不思議な現象がバレンシアオレンジにあり、その現象に注目したからです。それは、青いオレンジの実が徐々に熟してオレンジ色になるのですが、収穫前のひと夏を過ごす間に温度の関係でオレンジ色に熟した実が再び青に戻っていく現象です。ほんとうに不思議なのですが、外見は青く戻ってしまったのに中身はしっかりと熟して甘いオレンジになっているのです。この話を知った時に、僕はポール・エリュアールというフランスの詩人が書いた詩をすぐに思い出しました。人間がまだ宇宙から地球を見るはるか前に、「地球はオレンジの実のように青い」と、地球が青い星であることを詠ったのでした。それは、回青現象のパラドックスなオレンジともだぶりました。その詩を読んだとき面白いと思ったのは、人間の想像力というもの是非常に豊かで自由にイマジネーションできるのだということでした。実際に宇宙に飛び出してみたら、そのとき最初に宇宙飛行士がはじめに言ったことは「地球は青かった」と。このストーリーから、想像力と同様にきっと人間が本来持っている感覚や身体的な知覚能力もすごいはずだと感じました。オレンジも丸いし、地球も丸いし、あと、宇宙の果てというのか、空の向こうにあるもの、ということで天に無限にのびていくような塔をつくることにしました。この美術館は天井が高いので、垂直志向にどんどん突き抜けていく、さらに天まで届いていくというイメージです。塔の形体は実際に存在するイタリアの古い塔から引用しました。イタリア中部にあるルッカという町に、グイニージの塔という古い塔があります。それは、不思議な塔で屋上に樹が生えているのです。現在ではルッカの町にたったひとつしか残っていませんが、中世の時代には五十近く同じような塔があったらしいです。屋上に樹が生えている塔は記号としても機能していました。高い塔を立てて樹を植えることで財力と貴族がそこに住んでいるということを知らせるようになっていたそうです。屋上に樹が生えているその光景をみて、樹がどんどん天にのびていくような非常に不思議な感覚にとらわれました。このようなものが世の中にあるのだ、と。それで、今回その塔のフォルムを是非使いたいと思いました。家をテーマにした家シリーズの作品を制作していて、塔も家シリーズの作品の一環になります。家シリーズは、現在の自分自身のおかれた立場を確認する作業の一つとして始まりました。それは、日本人でありながら祖国を離れてイタリアに住み、旅をつづけ、どの共同体にも属していないような根無し草のような現在の自分自身の立ち位置について考えることです。それは、固有の文化を背負った静止したアイデンティティーをもつというのではなく、アイデンティティーがどんどん変容していくとか、あいまいになっていく、という自分自身を反映しています。家は一つのテリトリーや共同体に属さないアイデンティティーのメタファーです。もはや世界に中心はなく、群島のように島が点在するイメージとしての家です。群島のように点在する家には、様々な個性があり、それぞれの歴史と物語に反映されたアイデンティティーが時間や空間、他者との関係によって常に変化し続けます。さらに変容するア

イデンティティーは人間レベルだけではなく、動物、植物、自然まで広がりを見せます。こうした意味での家ということで、今回は自分自身をも反映させたオレンジのための家を作りたいと思いました。

小林：「空にふれるまでのあいだ」というタイトルを聞き、「空にふれるまでのあいだには感覚が全てである、という展示」をまず決めました。実際のスペースを見たとき、僕のスペースはいわゆる吹き抜けなのですが、上の方はふたが開いていて、入り口から入ると小粥さんのスペースから、壁が無くつながって流れている。そして、階段をおりながら、廣瀬さんの方のスペースにも入っていく。それで、下へ降りていくと、僕のスペースがあるのですが、窓があって、別の方角へ通路がある、要するに全部が、枠のない、抜けていけるスペースであり、それが壁を抜けて空ともつながっている。そのように見たときに、高い吹き抜けの空間を全部使おうと思いました。僕の絵は、最初から陳列だけするつもりは全くないのです。そういう絵としては考えていないわけです。僕の感覚からすると、そのようなことは不可能であると思います。人間は動いて生きていて、空間も動いている、光は変わる、それで時間も流れる、そのような中で、いわば、停まっていない時空間のなかで、作品と空との距離が空間の中に身をおいてある、その感覚だけが全てだと思うのです。あの空間の中に、絵を開放させようと思いました。大きい作品、それは一番高いところにあるのですが、上から、下から、床から、全部使って、作品を連動させながら、「空間自体を空」にしようというわけです。ひとつひとつの作品は、言ってみれば星みたいなもので、その空の中に入り動きながら、見えてくる光景は随時変わってくる、光も窓から入ってくる、窓は完全に利用しました。窓の隣にある、白い、あれは張っただけのキャンバスなども、つまりそういうものが、空にふれるまでのあいだ、であると思いました。感覚が全てだと思います。

Q：制作をされている過程で、第一話というタイトルを思い付かれたようなのですが、これは、何で一話なのでしょう。二話もあるのでしょうか。

小粥：第二話があるかどうか、それもわかりません。

Q：今回、ブロンズの作品をおつくりになったということですが、ブロンズを鑄造する前に、粘土で制作されていたのですよね。小粥さんといえば、塑像といえますか粘土で制作することにこだわっていらっしゃるように思われます。粘土で制作されているときにお考えになったことや、粘土に対する思いなどお話しただけないでしょうか。

小粥：粘土は好きですね。それも生理的な問題ですね。何で粘土が好きかというのは、理由はないです。ただ、僕は油が好きなのです。油っぽいものが。

Q：では油粘土をお使いなのですか。

小粥：そうです。そうです。

Q：油粘土の感触がお好きだったということですか。

小粥：何でもそうなのですが、まず、触って匂いなどをかいでみるのです。身体的に判断しているといえますか。視覚芸術なのですが、触ることができないのですけれど、触るとはじめてわかることって多いですね。こういう、彫刻などがある場所に行くと、隠れて僕は触るのです。

Q：この美術館は外にある作品は触っていいのですが、触ってみてどのようにお感じになりました？

小粥：それを作った人は、たとえばこのラインを、視覚的につくっていないと思います。リズム感や、重いものであるとか、そういうものを感じながら作ることができるという点で粘土が好きなのでしょうね。

小粥：第一話というタイトルからして、これはストーリーであるというニュアンスがあると思います。ストーリーや舞台や映画というのは時間の経過がまずあると思われれます。第一話を固定化させたかったのですよね。たぶん。個人的な意見なのですが、ブロンズというと、動かないもの、重いもの、というイメージがあるのですが、そういうところが何となくブロンズにいったのでしょうか。あと、僕の友達が鑄造をやっているのです。たまたま、ヴァンジさんの隣に家を借りて、しばらく住んでいたという話をあとから聞いて、それにのっかったのです。そういうストーリーです。

Q：その泉の陶磁器を用いて、プロジェクトをなさるそうなのですが、それは、2004年にその作品を発表したときから、延長線というのにつながりがあるのでしょうか。今回8月の26日、27日に行われます。

小粥：オルゴールのプロジェクトのことですよね。これは、作った当初、作る前から大道芸人のように扱いたかったのです。あと、美術館のような固定された場所ではなくて、あらゆるところにそれを置いて、オルゴールを回したいと思っただけです。

○関連プロジェクト

小粥丈晴 Drawing the Rainbow

日時：2006年8月26日（土）27日（日）雨天中止 両日とも10:00-18:00

会場：駿河平自然公園内（長泉町東野515-7 公園南側広場）

後援：長泉町、長泉町教育委員会

協力：TARO NASU、株式会社デュープレックス

地底から湧き出る泉をかたどり、白い磁器で制作されたオルゴールは、下部のハンドルを動かすと、オルゴールが回ってメロディーが流れ、泉から水があふれる仕組みになっています。

小粥丈晴は、今回の企画展「空にふれるまでのあいだ」において、《第一話》というタイトルの新作を出品しています。この泉のオルゴールは、2004年メゾンエルメス8Fフォーラムで行われた個展、「泉への道」において発表されました。

今回の第一回目は、協力者によって今後とも長く続いていくプロジェクトの、その一環となるものです。

廣瀬智央 Mail Project

ポストカードに旅をさせるプロジェクトです。

ポストカードを美術館内に設置してあるポストに投函して頂くと、展覧会終了後にイタリアからポストカードが返送されてきます。

